

5月8日の展示変更について（2026年5月9日）

日本館をご取材いただいている皆様へ

昨日（5月8日）の日本館における一部展示の休止およびパフォーマンス延期につきましては、ご理解とご協力をいただき誠にありがとうございました。

本日（9日）より、通常の展示を再開しております。また、昨日予定していたパフォーマンスは、本日16時より実施いたしますので、ご都合がございましたらぜひご来場ください。

昨日ご来場いただいたメディアの方々から「なぜ『赤ちゃんたちがストライキに入る』という展示変更に至ったのか」というご質問を多数いただきました。その経緯や背景につきまして、日本館チーム（代表作家、共同キュレーター、主催者）から以下のとおりご回答いたします。

なお、展示変更を決定した5月8日時点の言葉としてお受け取りいただけますようお願いいたします。

日本館代表作家（荒川ナッシュ医）：

5月6日の内覧会の初日に、隣のロシア館で発煙筒を使ったプッシー・ライオットによる抗議活動がありました。午後の日本館のオープニングレセプションでは、ウクライナのテティアナ・ベレジユナ副首相兼文化相がオーサカちゃんという赤ちゃんを日本館に連れて来られ、飛び入りでロシアに対して抗議するメッセージを、その後、共同キュレーターと私は準備していた「殺すな」というベ平連からインスパイアされた平和を願う詩を朗読しました。雨の中での韓国館との歴史的なコラボレーションが無事終わりました。

昨年、総合キュレーターが亡くなり、開幕直前には「金獅子賞」などを選考する国際審査委員が辞職するといった状況がありつつもヴェネチア・ヴェエナーレは開幕しました。こうした出来事が続く中で、私の展覧会は連日、赤ちゃん人形を抱っこする人たちでたいへん賑わっていました。一部のパビリオンでストライキがあると聞き、共同キュレーターと私は「赤ちゃんを殺すな」というメッセージを今日は一日発信することにしました。

共同キュレーター（高橋瑞木、堀川理沙）：

「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」は、世界の地政学的な秩序が揺らぎ、戦争の影が私たちの日常を侵食していくリアリティの中で産声をあげました。

本日、いくつかのパビリオンによるストライキが行われるなか、日本館の赤ちゃんたちは

自発的に音楽を止め、沈黙することを選びました。この「赤ちゃんたちのストライキ」は、展示の根幹にある問いそのものです。

本展において、観客は赤ちゃん人形をケアする側として参加しますが、同時に 208 体の赤ちゃんたちにその振る舞いを見つめられてもいます。サングラスをかけた彼らの沈黙の眼差しは、今日も私たちに問いかけています。

『果たしてあなたは、私たちが安心して暮らせる世界を築き上げているのか？』

私たちは、この場所から動かず、沈黙という形で意思を示し続ける赤ちゃんたちの主体性を尊重します。今日のこの静寂が、世界に対する彼らなりの真摯な応答であることを、来場する皆様にも共有していただければ幸いです。

主催／コミッショナー（国際交流基金）：

第 61 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館は、複数の国別パビリオンによるストライキが 5 月 8 日に行われることを受け、作家およびキュレーターと対応を協議いたしました。現地の社会状況とそれに呼応する作家の意向を尊重し、日本館を開館しつつ、展示における音の再生や参加型要素の稼働を一時休止する措置をとりました。また、本日 16 時に予定していたパフォーマンスは翌日の 5 月 9 日に延期しました。ピロティ階の赤ちゃんたちが戻った本来の形で、9 日より展示を再開いたします。